

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 15 日現在

機関番号：13101

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2012

課題番号：21592796

研究課題名（和文） 若年性乳がん女性における患者－性役割間の葛藤構造を基盤とした治療継続支援の開発

研究課題名（英文）Developing support for young women with breast cancer in order to continue their treatment, based on the problematic structure of conflicting between gender roles and patient roles

研究代表者

内山 美枝子（UCHIYAMA MIEKO）

新潟大学・医歯学系・助教

研究者番号：10444184

研究成果の概要（和文）：本研究は、若年性乳がん女性のがんとともに生きる患者役割と女性として抱えている性役割に注目し、その問題構造を明らかにすることを目的とする。本調査では、若年性乳がん女性である「当事者」とその「支援者」であるがん専門看護師、乳がん看護認定看護師にインタビュー調査を実施し、質的分析を行った。若年性の乳がん女性は、治療過程において性役割遂行の困難さがある半面、性役割遂行が闘病意欲に影響していることを見いだすことができた。若年性乳がん女性に対して、性役割を遂行しながら治療継続ができる支援体制の具体化が今後の課題といえる。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is to clarify and address, the problematic nature of psycho-social structures concerning gender/patient role conflict, as experienced by young, female, breast cancer patients in Japan. We interviewed 5 young female breast cancer patients, and 5 health professionals, who specialized in the care of breast cancer patients. We used semi-structured interviews. The interview data was subjected to qualitative analysis. The results suggest that subjects experienced patients/gender roles conflict during the course of their treatment. This study highlights the need to develop support systems for both health care client and health care providers, in order to support continuation of treatment.

交付決定額

（金額単位：円）

| | 直接経費 | 間接経費 | 合計 |
|--------|-----------|-----------|-----------|
| 2009年度 | 900,000 | 270,000 | 1,170,000 |
| 2010年度 | 800,000 | 240,000 | 1,040,000 |
| 2011年度 | 700,000 | 210,000 | 910,000 |
| 2012年度 | 1,000,000 | 300,000 | 1,300,000 |
| 年度 | | | |
| 総計 | 3,400,000 | 1,020,000 | 4,420,000 |

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：看護学、生涯発達看護学

キーワード：母性・女性看護学

1. 研究開始当初の背景

本研究は増え続けるわが国の若年性乳がん女性が抱えるがんとともに生きる患者役割と女性としての性役割に注目し、ウイメンズ

ヘルスの立場からその問題構造を明らかにすること、ならびに看護の立場から医療と生活をつないだ患者役割と性役割の協調を促進する治療継続支援プログラムの開発を目

的として行なうものである。

助産師でもある私は、がん専門病院での勤務経験を通して、心身・社会面だけでなく、「女性とがん」に焦点をあて、生殖機能と性役割、コミュニティの価値観や文化などを組み入れ、がんを体験した女性の生涯に着目した健康支援の開発を目指している。

20歳～30歳代の若年層で発症する乳がんの女性の体験を浮き彫りにすることを目的に行った研究(内山, 佐山, 2008)では「消えない痛みと副作用がせめたてる治療中止の選択」が日常化していた。ここから仕事や家事, 育児, 介護など多様な役割をもちながら10年以上の長期にわたって治療を継続しなければならないという多彩な役割ゆえの葛藤が問題視された。また, 医療優位の背景や心身の苦痛をもちながらも肯定的に自分自身を受け止めようと常に葛藤している状況が浮き彫りとなり, 看護支援の必要性があると考えた(平成17年度(財)安田記念医学財団研究助成『乳がん患者のライフストーリーからみる医療体験の意味—乳がん患者のQOL及び全人的な看護のプログラム開発にむけて—』)。

これら問題の構造は性成熟期の女性のライフサイクルに求められる性役割が強く関連し, 治療継続を阻むものが根底にあるのではないかと考えられた。本研究はウイメンズヘルスの立場から, 性成熟期に重篤な慢性疾患とともに生きることを迫られた女性たちに注目し, 看護の立場から医療と生活をつなぎ本来の生活をいかす生き方をしながら治療継続支援プログラムの開発を進めるものであり, 女性の生涯を通じた健康支援体制の整備につながるものとする。特に, わが国の『健康フロンティア戦略(2005年)』の「生活習慣予防対策の推進」には「女性のがん緊急対策」が謳われ, 乳がんと子宮がんについて緊急対策を講じるとともに女性の生涯を通じた健康支援対策が推進されている。

このような社会的要請を受け, 検診体制の整備や女性の生涯を通じた健康支援として「女性にやさしい医療」の推進を明言している。この研究コンセプトは医療のなかでみすごされている治療を受ける側の背景である。この背景はあくまでも個人的問題として現象を明らかにされることがなかった。しかし, 治療を受けるものといった患者役割と女性としての性役割といった2面以上の役割を重複しながら治療を継続している女性が実在しており, その役割を十分こなせないことから生じている問題が生じていることはその女性たちの会話や相談内容から実感として捉えられるのである。逆にそれらがうまく協調していくことは治療が継続できる支援になると考える。

これまでのがん女性の研究が対象として

きた性役割は, 生物学的性(SEX)に基づく身体的側面に偏ったものであり手術で失った乳房によるボディイメージの変化や妊娠, 性生活, 更年期症状についての研究が日本や欧米諸国で報告から看護支援も補助具の開発や性的適応の尺度の開発などもされてきている(Dow, 1994, Boekhout, 2006 takahasi, 2008)。乳がんの啓発運動はピンクリボン運動キャンペーンにより社会的にも確立してきており, 乳がん女性の社会進出の貢献は大きい。その一方, がんであることを必死に隠しながら生活している女性が若年層に多いことは今までの研究調査で実感してきたことである。視覚的なカバーはできても社会的な性役割の理解とともに治療を考えるとといった観点は少ない。

乳がん女性の社会的性(gender)も加えた女性性の特徴を把握する調査でクラスター分析の結果, 『妻として』『母として』『個人として』捉えた場合の心配事の違があるといった報告(奥村, 2005)はあるが, この性役割と患者役割を協調しながら生活することでどのような問題があるかといった観点から論述しているものはなく, 特にこの点において役割が多い若年性を対象にした報告はみあたらない。現在の日本においては未婚や高学歴などによってそれぞれの性役割の多様化がみられる(北村, 2002)。さらにわが国の女性は社会文化的背景の影響を受けていることが考えられ, 看護支援においても個人的問題にとどまらない支援体制が必要ではないかと考えられた。この研究のスタンスは, 量的分析的な評価軸ではなく, 当事者と医療者, 女性支援者間それぞれの視点軸での認識を質的に分析評価することで, ウイメンズヘルスの立場で心身の調整を図りながら治療が継続できる支援につなげることである。

2. 研究の目的

- (1) 35歳以下で乳がんを告知され, 現在も治療を継続している女性に対し, 半構造化面接を行い, 抽出された内容から構成構造研究の手法により, 患者役割と性役割における「当事者」の問題構造を明らかにする。
- (2) 国内で若年性乳がん女性に関わる乳がん認定看護師と女性センター相談支援者に対し, 半構造化面接を行い, 抽出された内容から構成構造研究の手法により若年性乳がん女性の患者役割と性役割に関する「支援者」の認識構造を明らかにする。
- (3) 「当事者」と「支援者」の役割から得られた若年性乳がん女性の経験している役割葛藤の構図を明らかにし治療継続支援プログラム案の検討をする。

3. 研究の方法

研究期間は4年間で行った。

1年目は文献レビューによるdata base作成と研究参加者の募集と依頼方法の検討、調査を行うための研究補助者に対する研修会を開催し調査実施体制を整えた。

2年目と3年目の2年間は、データ収集を行った。本研究は以下の2件の調査を実施した。

① 35歳以下で乳がんを告知され、現在も治療継続している女性の半構造化面接調査(5名)

② 国内で若年性乳がん女性に関わる乳がん認定看護師と女性センターの相談者の半構造化面接調査(5名)

これらは研究参加者の自発的応募によって希望地で実施した。そのため希望者人数によって変動があり、1と2の調査は並行して実施していく。それを繰り返しながらデータを蓄積する。データの蓄積と整理も同時に行いながら計画の進み具合の調整を行った。なお、研究継続のために参加者を常に募集しながら確保を図った。

4年目は、データの分析・解釈とともに「当事者」と「支援者」の役割から得られた若年性乳がん女性の経験している役割葛藤の構図を明らかにし治療継続支援プログラム案の検討した。検討するにあたり、ウイメンズヘルス研究の専門家や乳がん認定看護師、がん専門看護師の専門的助言を得た。本研究結果から若年性乳がん女性の治療継続のための支援に関するリーフレット案について検討した。各年度による方法の詳細は下記に示す。

○平成21年度

本学医学部倫理審査委員会の承認を得たのち研究参加者(若年性乳がん女性・乳がん認定看護師、女性センター相談員)の募集と登録、面接環境の調整と実施体制の準備を行った。

参加者募集：マスメディアやインターネット、ポスターにより自発的な参加者を募った。施設勤務の専門職者には施設への公文書で依頼を行い、募集に応じた自発的参加者を募った。

研究補助者への研修会：研究補助者には研究の趣旨および質的データ整理(テキスト作成)について研修受講後に面接調査準備と質的データの整理の業務担当をしてもらった。データの整理についてはソフトでデータ処理を行った。

調査用具および環境準備：面接場所は、研究参加者の希望地または新潟大学保健学科看護相談室を準備した。

使用機器：面接用録音機(ICレコーダ)現有2,1台新規)計3台、ノートパソコン(移動

地でのデータ処理用、現有1)、データ整理用パソコン画面(新規2)。

○平成22年度-23年度

4月から正式に参加者の調査を開始した(若年性乳がん女性5人・乳がん認定看護師、女性センター相談員5人)。参加者は研究者と連絡を取り合い、希望地でインタビューを行った。データ収集は研究者及び研究連携者が行い、データ整理は研究連携者の指導のもと研究補助者が実施した。面接のテープおこしは守秘義務とデータ消去について誓約書を取り交わした。

○24年度

本研究の目的によりデータの分析・解釈とともに「当事者」と「支援者」の役割から得られた若年性乳がん女性の経験している役割葛藤の構図を検討する。分析手法としては質的分析である。この分析では、がん看護を専門領域とする看護専門職者及び研究連携者で妥当性の検証を繰り返して行った。以上の所見について日本がん看護学会での発表報告をしながら検証を重ねていった。

4. 研究成果

(1)成人期女性における性役割と乳がん治療過程に関する文献検討

目的

本研究は性役割が大きい成人期で、生活基盤の長期治療を強いられる乳がん女性の性役割に関する文献レビューを行い、治療や病と性役割遂行への影響や治療継続との関係に関する国内外の動向と現状を明らかにすることを目的とする。

方法

過去10年の医学中央雑誌(以下：医中誌)Web版[CHINAL]、[MEDLINE]を用い、「性役割(gender role)」または「社会的役割」「成人期」「女性」「治療過程」をキーワードに検索を行った。文献の動向は掲載雑誌の種類、研究方法を示し、国内・海外別にレビューシートを作成した。

分析方法

文献内容は内容分析を行い、壮年期における性役割の遂行と治療に関する報告、性役割に着目した介入や支援とその有効性に分類した。

倫理的配慮

公表の承諾がされているWeb上の文献検索ページを使用し調査した。

結果

本邦において性役割に関する研究は検索したところ見当たらなかった。治療過程と乳がん9件抽出された(原著論文6件、会議録3件)。における報告に含まれているものがほとんどであった。その中で【家族内役割遂行の困難性】、【QOL低下でゆらぐ達成感】、【治療過程の役割機能の変化】といった治療

が家族や子供に対する親役割の遂行を滞らすことやパートナーのフォローに関する配偶者役割の報告が見られた。職業役割に関する報告はみられなかった。これは本邦における女性の性役割を象徴する形と同様であった。海外の報告は、Web版[CHINAL], [MEDLINE]で[gender role], [breast cancer], [Young women]で13件抽出された。【治療継続における役割遂行のためのサポート】、【文化的社会的背景の影響】【治療後の身体観】3カテゴリーに分類された。【治療継続における役割遂行のためのサポート】には、[乳がんを乗り越えるための支援]として成人期より若い年齢になるに従い職業的な側面の役割遂行の支援を必要としていた。[診断直後の乳がん女性が必要とする健康管理]では変化する生命状況に対処する能力へのニーズがあり知識と社会心理的支持の必要性を感じていた。[化学療法中のボディイメージへの運動療法の介入の効果]では、化学療法中後に行ったエクササイズで、若年者は、プラス思考と高レベルの身体活動がみられた。身体満足感とネガティブ思考は低レベルであった。[考察]治療過程と女性が性役割を遂行することへの困難さについて報告があるものの、この女性役割遂行のサポート体制は調整がされていないという現状がみられた。特に職業役割に治療は影響を与えることが予測されるため個別背景として捉えるのではなく支援体制について検討することが示唆された。これらから、がん治療とともに女性として抱えている性役割に注目し、その問題構造を明らかにすること、さらに地域性、価値観にも関連させた基本情報も考慮していくことが示唆された。

(2) 若年性乳がん女性の患者役割と性役割における葛藤構造

目的

若年性乳がん女性の患者役割と性役割における葛藤構造を明らかにし、医療と生活の協調を図る治療継続支援を検討する。ここでいう性役割 (gender role) とは、その性別が社会的に期待されている役割とする。

方法

乳がん診断時に35歳以下の女性(若年性乳がん女性)を対象とし、半構造化面接を行った。面接内容から逐語録を作成。構成構造研究の手法により質的分析を行い、概念、カテゴリー、構造図を作成した。本研究はA大学医学部倫理委員会の承認を得た。研究の主旨、匿名性の保持、参加は自由意思に基づくことを口頭と文書で説明し、自署署名にて同意を得た。

結果

対象者5名(診断時年齢31~35歳)であった。

若年性乳がん女性は治療を続けていきたいといった患者役割を遂行する側面である(病改善の欲求)と社会的に獲得してきた性役割を維持するという意志(外的役割の存続)は、同一体の中で(瞬時の決定作業)をしながら日々を送っていた。これらは周囲に(悟られない行為)で家族や職場にも影響しないことに配慮していた。その一方、(別の理由で休む)として治療や症状に関して体調管理をする生活を繰り返していた。それらは、患者役割より性役割としての行う(周囲問題の優先)をしていた。それらは負担度ではなく性役割を遂行できたことが(病の在る自身への自信)になっており、周囲に支えられている感情から(回復への希望)や(生きていく気力)になっていた(図1)。

考察

これらの分析を元に、治療過程と性役割遂行の困難さがある半面、性役割遂行は闘病意欲にも関わることが示唆された。

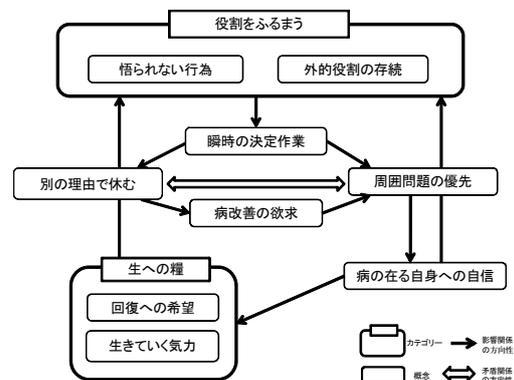


図1. 若年性乳がん女性の患者役割と性役割における葛藤モデル

(3) 若年性乳がん女性の患者役割と性役割における支援者の認識構造

目的

乳がん看護に関わる支援者が若年性乳がん女性(以下対象者)の患者役割と性役割に関わる問題をどのように認識しているか、その構造を明らかにし治療継続支援の検討をする。

方法

国内で乳がん看護支援を専門領域とする看護師5名を対象とし、半構造化面接を行った。面接内容から逐語録を作成。構成構造研究の手法により質的分析を行い、概念、カテゴリー、構造図を作成した。本研究はA大学医学部倫理委員会の承認を得た。研究の主旨、匿名性の保持、参加は自由意思に基づくことを口頭と文書で説明し、自署署名にて同意を得た。

結果

対象は病棟または外来で乳がん患者に関わるがん専門看護師、乳がん看護認定看護師（以下支援者）5名（臨床経験26年～7年）であった。

支援者は対象者の若年性から、社会的側面の問題認識はもっていた。しかしそれに関する情報は〈入手しにくい情報〉と捉えていた。そのため〈初回の反応重視〉し、支援者は対象者に対して意図的に〈聞かない対応〉と〈話しだす環境〉を設定し、対象者が情報提供する時期を待っていた。そして〈情報開示をした時を逃さない〉ようにし、支援の検討をしていた。対象者の問題は〈婚姻による近親者との関係混乱〉、〈経済困窮上の治療〉、〈職業継続の不具合〉、〈妊孕性の影響〉が浮上しており、支援者はそれらに〈個別対応〉として特別な医療チームの結成や調整をしていた。その一方で支援側の〈個別対応の限界〉も感じていた。

考察

支援者は、若年性に関わる対象者の社会的背景を加味しながら対処を共に検討していた。しかし壮年期に多い乳がんにおいても、未だ若年性の問題は個別対応をとらざるを得ない状況が示唆された（図2）。

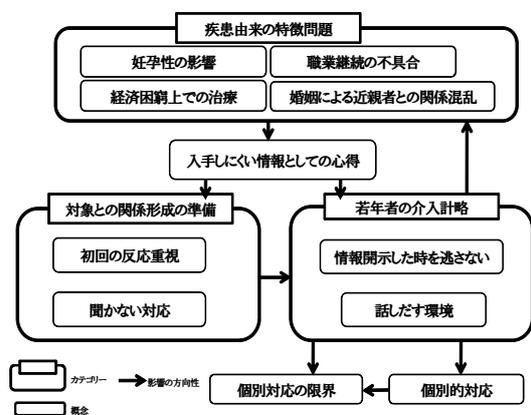


図2. 若年性乳がん女性の患者役割と性役割における支援モデル

(4) 若年性乳がん女性の治療継続支援

本研究の目的は、若年性乳がん女性ががんとともに生きる患者役割と女性として抱えている性役割に注目し、その問題構造を明らかにし、若年性乳がん女性の生活と治療継続をつなぐケアプログラムの構築化をはかることである。現在までの調査結果を踏まえ、がん治療とともに今までの生活が可能な支援体制の調整と具体的な支援の検討を行った。

若年性乳がん女性である「当事者」の問題構造では、社会的に獲得してきた性役割を維持するという〈外的役割の存続〉を行いつつ、性役割に関わる〈周囲の問題を優先〉していた。その反面、性役割を遂行することが〈病の在る自身への自信〉になっており、〈回復への希望〉や〈生きていく気力〉になっていた。これらから性役割が維持できる治療環境と支援の必要性が示唆された。

がん専門看護師、乳がん看護認定看護師である「支援者」の認識構造として、支援の対象が若年者である観点から、乳がんの治療過程と生活像を合わせて支援をしていた。しかし、それら生活上の情報は〈入手しにくい情報〉と捉えていた。そのため、当事者には意図的に〈聞かない対応〉という「対象との関係形成の準備」から始めており、「若年者の介入計略」を行いながら支援方法を模索していた。これら双方が抱えている状況は、双方で認識することで、支援検討の基盤と示唆された。双方が認識し合う具体的な方策として、若年性乳がん患者向けにはリーフレットを作成する。支援者向けには、本研究に関わるホームページ及び研究会での公表と研修会の開催を行っていく。本研究では、若年性乳がん女性の治療継続支援の主要な問題構造について検証し、支援システムの基盤を検討することができた。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計3件）

- ①内山美枝子、手記にみるマンモグラフィ受検時の体験構造、新潟大学医学部保健学科紀要、査読無、10巻、2013、79-88
- ②内山美枝子、治療過程で生じる乳がん女性の心身苦痛体験の構造モデル、日本がん看護学会誌、査読有、25巻、2011、24-34
- ③内山美枝子、青山友香里、若年性乳がん体験者のライフストーリーからみる治療過程における『子の存在』の意味づけ、第41回日本看護学会論文集論文集母性看護、41巻、査読有、2011、126-129

〔学会発表〕（計6件）

- ①内山美枝子、若年性乳がん女性の患者役割と性役割における支援者の認識構造、2012.2（松江市）
- ②内山美枝子、若年性乳がん女性の患者役割と性役割における葛藤構造、第26回日本がん看護学会学術集会、2012.2、（松江市）
- ③内山美枝子、成人期女性における性役割と乳がん治療過程に関する文献検討、第25回日本がん看護学会学術集会、2011.2（神戸市）
- ④内山美枝子、山崎真子、A県内における乳がん患者の通院治療における看護支援の

現状, 第 41 回日本看護学会成人看護Ⅱ, 2010. 8 (福岡市)

- ⑤内山美枝子, 青山友香里, 若年性乳がん体験者のライフストーリーからみる治療過程における『子の存在』の意味づけ, 第41回日本看護学会母性看護, 2010. 7 (つくば市)
- ⑥大場 葵, 内山美枝子, 子宮がん再発を経験した女性の追加治療における意思決定に影響する要因, 日本保健医療行動科学会, 2009. 6, (神戸市)

[その他]

ホームページ等

本研究における研究協力応募と情報提供のためホームページを 2009 年 9 月から開設した (図 3)。

研究者番号: 00179532

石田 真由美 (ISHIDA MAYUMI)

新潟大学・医歯学系・助教

研究者番号: 40361894

(平成 24 年 12 月 27 日辞退)



図 3. 本研究のホームページ (Top page)
若年性乳がん体験者の医療と生活をつなぐ
URL: <http://www.clg.niigata-u.ac.jp/~ucci-/index>.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

内山 美枝子 (UCHIYAMA MIEKO)

新潟大学・医歯学系・助教

研究者番号: 10444184

(2) 研究分担者

佐山 光子 (SAYAMA MITSUKO)

新潟大学・医歯学系・教授

研究者番号: 50149184

定方 美枝子 (SADAKATA MIEKO)

新潟大学・医歯学系・教授